

2025年4月6日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教32「朽ちない命のために」

イザヤ55：1～3、ヨハネ6：22～27

この群衆は、どうして執拗にイエスさまを捜したのでしょうか。少し前のところに「イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでもた山に退かれた」（15節）とあります。人々はイエスさまを王にしようとしたのです。その理由は単純です。たった五つのパンと二匹の魚で五千人もの人々を満腹にしたからです。ある人は、ここに群衆の熱狂、興奮があったと記しています。当時はローマ帝国の支配下にありますからユダヤ人の食糧事情はあまり良いとは言えないでしょう。そういう中でパンの問題はそれこそ死活問題でありました。イエスさまが五つのパンと二匹の魚で人々を養われた時に、この人が王になってくれたら、自分たちはもう飢えないで済む。場合によっては、汗水垂らして働かないで済むと考えたかもしれない。自分たちにとってこんなに都合のいい人はいない。こんなに便利な人はいない。だから熱狂した。執拗に捜したのです。ここに人間の姿が見え隠れしています。

わたしたちも自分にとって都合が良く、役に立つかどうかで神さまの救いを考えていることがあります。今は物価高で随分お米も高くなりました。それに追い打ちをかけるようにアメリカの関税の問題がある。日本経済に与える影響は深刻だと言われます。そうするとこれから生活はどうなるのか。神さま何とかしてください。藁をもすがる思いで必死に祈るかもしれない。そのような時にこの群衆のように必死にイエスさまを求めるのです。けれどもイエスさまは、必死に追いかけて来た人々に向かって言われました。「あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ」（27節）これはまさに凶星です。「しるし」神さまの御業を見たからではなく、パンを食べて満腹したから、そこに救いを見ていたから必死にイエスさまを捜した。そしてこう言われました。「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい」（27節）

カルヴァンは、説教の中で次のように述べてます。「わたしたち人間は、自分の感覚に従って生きていますから、空腹ならば食事をし、喉が渴けば水を飲むことは当然のことであって、あえて誰かに食べ物を探し求めなさいなどと忠告されなくてもそうするでしょう。さらに飢饉になれば、獲物を狙って貪り食らう獣のように人間は狂います。そこには慎みとか、人間らしさなど全くなってしまう。つまりわたしたち人間は、この世界と今の自分の命にあまりにも心奪われています。それに対して、わたしたちの魂を養う霊的な食物が不足している場合はどうでしょうか。これを必死で捜し求めて、これによって満たされたいとは思わないのです。その結果、自分が滅び行く哀れな状態にあることを感じることなく、そのまま終わりを迎えてしまいます。」（『霊性の飢饉』41～42頁）

このことは今日の御言葉にも通じるでしょう。わたしたちはこの世のことにあまりにも心奪われ、自分が神さまの御前に自分がどういう状態であるか気づいていない。ただパンのために働く、一生懸命になっている。それは糧にならないもののために必死になっていることであり、それでは人間として不完全な状態なのです。カルヴァンは「慎みや人間らしさ」を失うと言いますが、まさに今の世の中がそういう状況ではないでしょうか。世界はこれまで神さまの御前にどう生きるかを真剣に考えてきませんでした。この世のことであくせくして来た結果が、今の世界の姿だと言わなければならない。

ドイツの社会学者マックス・ヴェーバーの研究の第一人者である大塚久雄先生の『生活の貧しさと心の貧しさ』は50年近く前の本ですが、今の世界の状況を的確に言い当てています。近代資本主義経済の行き着くところには「人間疎外」と「世界の無意味化」が起こると。人がモノ化され、使い捨てにされ、世界は目的を見失い、迷走する。その通りではないでしょうか。4月に入り若者たちが意気揚々と社会に出ていく姿がテレビに映りますが、自分は何のために働くのか。ただ給料がいいからではなく、生活のためだけでなく、人間として人間らしさを失わずに生きていくために何が大切なことなのか、そのことに思いをいたしてほしい。特に教会に集う人たちは「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい」というイエスさまの言葉を思い起こしてほしいのです。

「永遠の命」とは、この世の命が永遠に続くことでありません。それは新しい命、神さまと共に生きる命、神さまとの正しい関係に生きる命のことです。もともと人間は神さまにかたどって造られ、その正しい関係の中にもありました。永遠の神の国、楽園を生きるものだったのです。ところが約束を破り罪を犯してしまいます。神さまの形を壊したのです。楽園を追放される時に、神さまはアダムに言われました。「お前は顔に汗を流してパンを得る、土に戻るときまで」（創世記3：19）人間は神さまから離れてしまった結果、そのように朽ちる食べ物のためだけに生きるものとなってしまいました。

けれども、神さまはそのようなわたしたちが、もう一度、永遠の命を取り戻すことができるようにしてくださいました。そのためにイエスさまが来てくださいました。イエスさまが十字架で命を献げてくださった。ご自身をまことのパンとして、朽ちない食べ物として与えられるためです。今日のところで「主が感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所」（23節）とありました。これは五千人の供食の奇跡が行われた場所のことです。「主が感謝の祈りを唱えられた」というのは、最後の晩餐を思い起こさせますし、この後あずかります聖餐を思い起こさせます。イエスさまはご自身の体をそのように永遠の命に至る食べ物として与えてくださいました。「これこそ人の子があなたがたに与える食べ物である」（27節）そのイエスさまによって、その命のパンによってわたしたちは永遠の命へ導かれました。

今月は教会総会があります。教会の教勢、財政はキリスト教界全般に低迷しております。また加えて世界情勢や経済の問題などを踏まえますと、本当に先行きが見えない。5年後、10年後、教会はどうなっているのか。世界はどうなっているのか。そう考えると不安になります。でもそのような時に、わたしたちはヨハネ福音書の第6章を読んできました。五千人の供食、海上歩行、そして今日の御言葉によって、一つ確信したことがあります。今こそ教会は永遠の命に至る食べ物のために働かなくてはいけないということです。この世と一緒に下を向いてはいけません。このような時代だからこそ、上を見上げて、神さまの与える救い、永遠の命を示していきましょう。

天の父よ。永遠の命という本当の人生の目的を見失っております。それゆえに人間らしく生きることができないのです。けれどもそのようなわたしたちのためにイエスさまはご自身の命を永遠の命に至る食べ物として献げてくださいました。どうぞこのイエスさまの救いによってその目的に至る恵み、喜びに気づかせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。